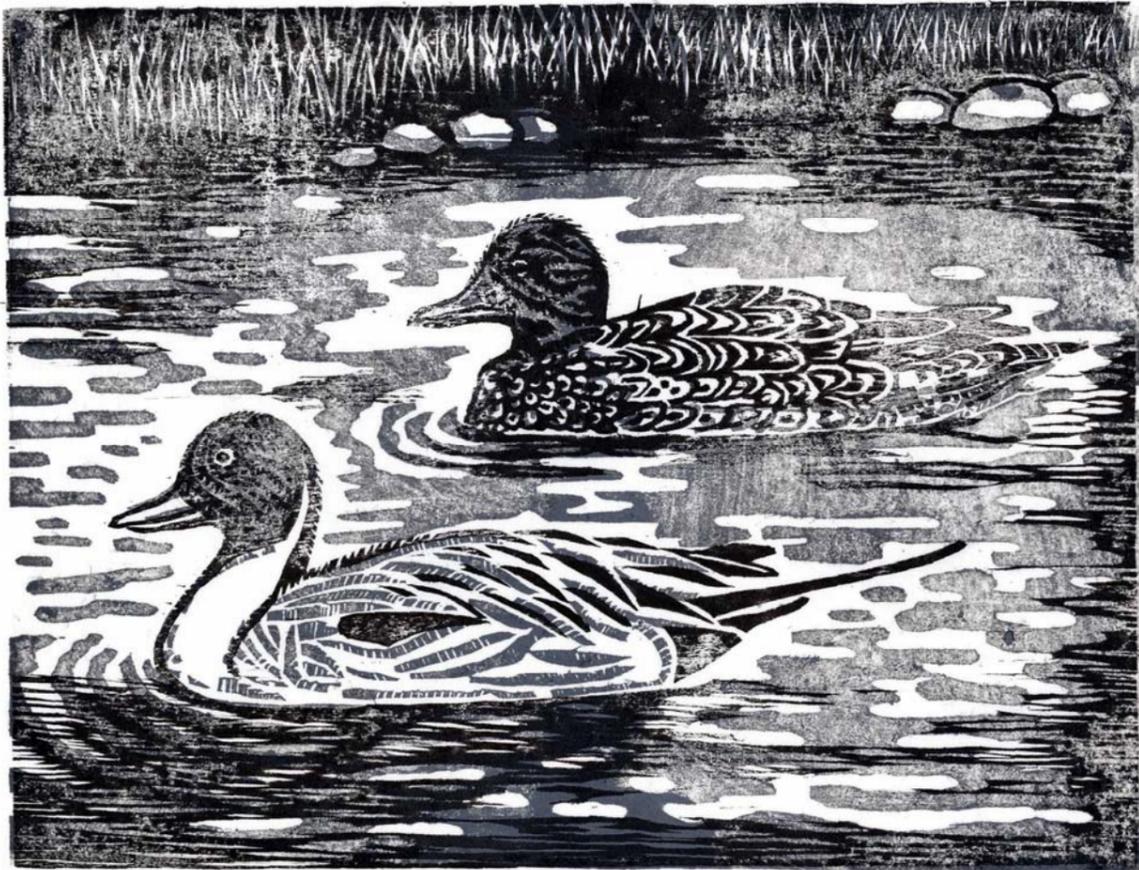


いたちかわらばん

通刊 73号 颯川・狹川 / 川原番・瓦版 '16夏号



【版画 宗森英夫】

いたち川のオナガガモ

いたち川散策路 (野鳥編)

四季を通して常時見られるもの(留鳥)として、いたち川周辺に棲息する野鳥としては、カルガモ、サギ類(アオサギ、コサギ、ゴイサギ)、セキレイ類(ハクセキレイ、セグロセキレイ、キセキレイ)、さらに川の宝石と言われるカワセミも観察することができます。その他にも馴染み深いハト類(キジバト、ドバト)、カラス類(ハシブトカラス、ハシボソカラス)、スズメ類(スズメ、ウグイス、メジロ)など多種多様…。

渡り鳥と言うと冬季を連想しますが、夏には、ツバメ、アオバズクが渡ってきて観察することができます。冬季になれば、カモ類(マガモ、コガモ、オナガガモ)、カモメ類(ユリカモメ、オオカモメ)などが忘れずに来てください。

漂鳥とは、夏には林へ、冬には里や川辺に来る野鳥のことですが、ウグイス、ホオジロ、シジュウカラ、カワラヒワ、アオジなどを観察できます。

最近健康のために、最も手軽でお金もかからない運動として、散歩やウォーキングが盛んになっています。

一人では長続きしないので、仲間をつくって「〇〇ウォーキングクラブ」のようなものが、たくさん出ています。

いたち川縁の散策路は、日々変化する景観や鳥、魚などを鑑賞しながらウォーキングするには最適です。これからも、多くの利用者が増えることを期待しています。(いもり)

☆シラユキゲシ探訪記☆

4/21(木) ほぼ雨の心配のない高曇りの空の下、六反町公園(扇橋の水辺)に参加者総員15名(男性6名、女性9名)が揃ったので引率側の8名(区役所2名、オタスケ隊員6名)と共にスタートしたシラユキゲシ探訪について報告しよう。この日、上郷市民の森に咲くシラユキゲシに会うためにいたち川を川上に向かって歩き、小さな山を歩き登って28種類もの草木たち(※後記)と交流した。

別に植物群の頂点にシラユキゲシがあった訳ではないのだが、沢山の植物観察と夫々への思い出やねぎらいの会話が満たされていた我々の探訪の仕方がそんな感じだったのである。

それはまた参加された方々の地域の小さな自然を愛する気持ちの蓄積であったようにも思われる。

中国を原産とする小さな可憐な花への静かで強い情熱が今回の探訪劇を産み出したものであることだけは間違いない。(ピンテール)

※この日観察対象の草木

イタドリ、オニタビラコ、オニノゲシ、カントウタンポポ、キュウリグサ、グビジンソウ、クレソン(オランダガラシ)、コウゾリナ、コオニタビラコ、シバザクラ、ジャガ、ショカツサイ(オオアラセイトウ)、シラユキゲシ、スズメノカタビラ、スズメノケリ、ツルカノコソウ、ツルタチツソスミレ、ハルジオン、ハンゲショウ、フタナ、ホウチャクソウ、ヤマユリ、イヌシデ、オオデマリ、オオシマザクラ、コナラ、ヤシャブシ、ヤマザクラ

☆いたち川右支川沿い探査ウオーキング☆

3/9(水) 雨予報に追い立てられながら参加者9名(男性5名、女性4名)と引率者6名(オタスケ隊員5名+区役所1名)は大いたち橋から右支川を上流に向かった。石橋、駒形堂(こまかんどう)橋を経由して慶長橋を渡り長慶寺の入り口に立ち、徳川家康が鷹狩りの際に立寄って水を所望し、そのお礼として立派な湯呑を贈られたという逸話を聞く。

田んぼに水を引き入れるための川の中に残る堰を見たり、川辺で「ウキツリボク(別名:チロリアンランプ)」「ツルニチニチソウ」「ヒメツルソバ」「セリ」「アジアンタム」などの植物を観察した。

馬頭観音の石碑に刻まれた行き先(かなざわ)(すぎた)(みね)など身近な地名を読み取ったりしている内に細かい雨が降り始めたので早く屋根の下に入ろうとふじやま公園への道を急ぐ。弓道場わきの竹林の道を上り下りしてたどり着いた長屋門をくぐって古民家に入るところで待機していた宗森オタスケ隊長と合流した。古民家には雛祭りの飾付けがあって88人も可愛い幼稚園児が見学を終えていた。

我々も時代を偲ばせる沢山のひな壇を見学した。

土間にあったカマドについて関東では「ヘツツイ」とも言った、という説明に関西出身の女性がすかさず関西では「オクド」と言い返して、どっと笑いを誘った。古民家の歴史やいわれをひとしきり学んで正午少し前に雨の中を帰りのバス停に向かった。

(ピンテール)

☆秋のウオーキング募集☆

ツリフネソウ・ミゾソバの群落!

洗井沢川(いたち川左支川)の源流部は、種類の植物が多く市内でも1番であると言われております。秋の荒井沢には、溜池の周辺や湿地には、珍しい植物が開花しています。

秋の爽やかな空気のもと、山の頂上の展望台から東京スカイツリー、横浜市内を眺めて見ませんか。

散策コース

栄区役所→洗井沢川せせらぎ緑道

→あらはばき祠→庚申塔

→洗井沢川小川アメニティ

→炭焼き小屋→皆城山山頂

→荒井沢市民の森→溜池跡→谷戸→極楽広場解散



日時:平成28年9月27日(火)

10:00(集合)~13:00(解散予定)

※雨天中止、中止の場合は、前日ご連絡します。

集合場所:栄区役所 ※区役所駐車場は有料

参加費:100円(保険料等)

持ち物:飲み物、雨具

参加人数:20名(先着順)

参加要領:参加希望者は、葉書、メール、FAXで住所・氏名・性別・年齢・電話番号を明記の上、平成28年9月1日(木)までに下記に応募して下さい。(当日消印有効)

応募先:〒247-0005 栄区桂町303-19

(電話)894-8161 (FAX)894-9127

(アドレス)sa-kikaku@city.yokohama.jp

栄区役所区政推進課企画調整係担当

※内容については、和久井(いたち川 OTASUKE 隊、080-3498-0552)まで

発行年月

2016年7月

通刊73号

発行:狹川OTASUKE隊 (いたちがわおたすけたい)

OTASUKE隊事務局:栄区役所区政推進課企画調整係

栄土木事務所下水道・公園係

〒247-0005 横浜市栄区桂町303-19

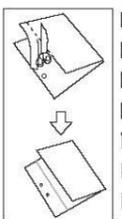
TEL 045-894-8161 FAX 045-894-9127

〒247-0007 横浜市栄区小菅ヶ谷1-6-1

TEL 045-895-1411 FAX 045-895-1421

(お便り・お問い合わせはこちらまで)

この部分を
切り取って
ファイルにす
ると便利です



初版「いたち川情報マップ」の紹介 第3弾!!

平成8年(今から20年前)に初版

「いたち川情報マップ」発行!

いたちかわらばん71号から順次紹介
しています。



水 水があつてこそ川

いたち川の水は、どこからきてどこに行くのか。

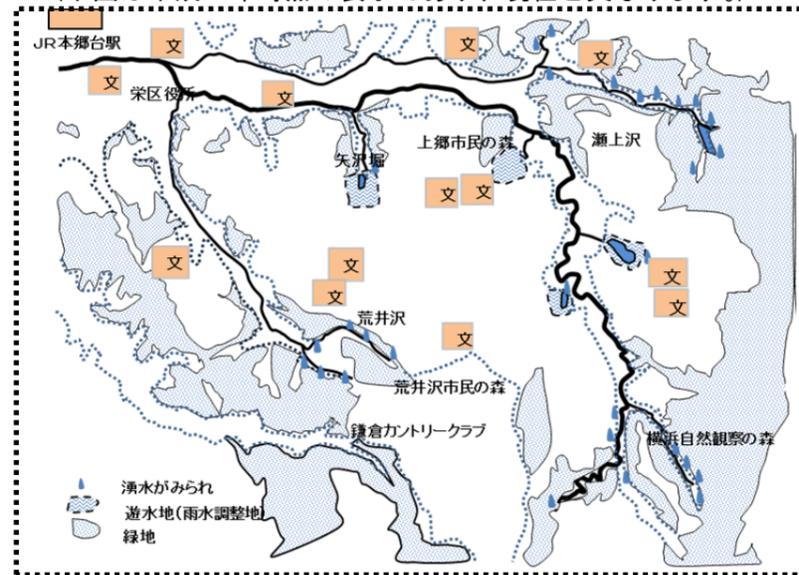
昔に比べて水が減ったのはなぜか。

それにもかかわらず大雨であふれてしまうので、
改修工事がすすめられているのはどうしてか。

水源を追って川を見て歩き、流入する水についても調べてみました。

いたち川水源を調べる

(下図は平成8年時点の表示であり、現在と異なります。)



源流をきわめる

川の源は当然のことですが、すべてが雨水です。源流に降った雨は、植物の葉についたり、いったん土の中に蓄えられたりし、少しずつしみ出していきます。小さな谷戸でも、各所に林があれば相当な水が見られました。

湧水が少しずつ集まってだんだんと川らしい流れになります。いたち川の源流には、鉄分やミネラルが多く溶けだした水がみられるようです。

もう一つの水の流れ

いたち川には、警察学校のところで下水の処理水も流れ込んでいます。流域を越えたもう一つの水の流れは、遠くからパイプで運ばれ蛇口を通り、下水処理場で処理されて川に流れ込むものです。

そもそも外からもってきた水ですから、流域に入り込む水の全体の量は昔より増えているはずですよ。

埋められた谷戸からの水や川底の伏流水

もう一つの意外な水源は、造成地の遊水地(調整池)にしみ出す水です。

いたち川の両側の丘に広がる住宅地への入口部分には、大きな遊水地(調整池)がいくつかありますね。そこには、埋め立てられた地下の谷筋を伝わってきた水がしみだしてきています。かつての谷戸の水ほど多くはないでしょうが、これも今は水源になっています。

川に沿った川底の下には、もう一つの川が流れており、これを伏流水と言って、川周辺の地下水を集めて川の水量を保っています。

以上が水について記述を紹介いたしました。他に「川と水の循環、水質保全、下水道のシステム」について表示されておりますので、次号では「水」の第2部として記事を紹介していきます。
(水・人・子)

いたち川中流域を彩るアジサイの道



中流域という表現は適切とは言えないかも知れませんが、正しくは石原橋から尾月橋間左岸の散策道に植えられている約450本のアジサイの道のことです。

5月下旬~6月、雨季に当たるこの時期に散策道を賑わしてくれるアジサイは、他の花より花も大きく目立つうえに開花期間

も長いので、梅雨期の気分が沈みがちになる季節に大輪の花を咲かせて道行く人を楽しませてくれます。

近年このアジサイの道で早朝から花を撮影する人や散策を楽しむ人達が増え、ちょっとした名所みたいになっています。

この草稿に当たり、アジサイの道の歴史を振り返ってみました。私が最初にアジサイを植えたのは2003年、横浜市の農政局から苗木30株を提供され、尾月自治会の子供たちと川辺の斜面で植樹会を開催したのが最初です。その後も毎年30~50本増やしていきました。

現在は、石原橋から階段下までの散策道の両側に250本、ツツジ園の散策道沿道に100本、尾月住宅の東の森の斜面に約100本が植わっています。

当事者としては、人気の散策コースとして多くの人に楽しんで貰っていることに喜びを感じています。



(上郷森の会
モモンガ)

山形県高島町(たかはたまち)の

「紹介

童話「泣いた赤おに」の里

(山形県高島町 菊地広憲)

私は、横浜市が行っている人事交流制度で二〇一〇年度~二〇一一年度の二年間、栄区政推進課にお世話になり、いたち川OTASUKE隊のお手伝いをさせていただきました。また、横浜市との交流初年度から、栄区民まつりに出店していますので、高島町をご存知の方もいらっしゃると思います。

高島町は奥羽の山なみ深くに源流をもつ屋代川・和田川の扇状地にひらけた、みのり豊かな美しい町で、「まほろばの里」と呼ばれています。米、ブドウ、ラ・フランスといった農産物、それらを原料とした日本酒、ワイン、ジャムやドレッシングなどの特産品があります。

また、四季折々の景色やイベントを楽しむこともできます。これからの季節は、夏の風物詩として八月十五日~十六日に高島町最大のまつり「青竹ちようちんまつり」が開催され、神輿と民謡パレードが町内中心部をねり歩きます。さらに十月には、高島ワイナリーの収穫祭があります。高島のワインは国際オリンピック委員会評価委員を招いての首相主催公式夕食会で使用され好評でした。二月には、「冬咲きぼたんまつり」があり、雪囲いの菰(こも)の中に咲くぼたんと冬景色がおすすです。

童話作家の浜田広介は高島町の出身です。彼の代表作である童話「泣いた赤おに」を「さかえなんでも知り隊」で取り上げていただきました。この秋には、「泣いた赤おに」をモチーフとしたドラマ「私の青おに」がNHKで全国放送される予定です。ぜひご覧ください。高島町には、ひろすけの童話に流れる《思いやりと温かいこころ》が息づいています。

また、高島町には山形新幹線が停車します。東京駅から二時間二十分、遠いようでも近い町ですので、ぜひ、皆さんのお越しをお待ちしています。



青竹ちようちんまつりの「りゅうみこし」



菰(こも)の中に咲く「冬咲きぼたん」